

宋 (そう)
(北宋 ほくそう) 960—1127年・(南宋 なんそう) 1127—1279年

大唐帝国末から五代十国時代にかけての数十年の戦乱に終止符を打ったのは、後周の近衛軍長官であった趙匡胤である。趙匡胤は禅讓を受けて960年宋を建国し皇帝（宋の太祖）になった。

この皇帝は、柴氏や降伏した国王たちの地位を保障し、刑罰を軽くし、農業と学問を奨励し、太平の世を築いた。

趙匡胤が、ほぼ中国を平定し、弟の趙匡義（宋の太宗）によって、979年中国は完全に統一された。

その後、宋は1127年、第八代皇帝徽宗のときに北方の金に亡ぼされ南に逃れて再建された。

この再建された宋を南宋、それまでの宋を北宋と呼び、北宋と南宋をあわせた約320年間を宋と呼ぶ。

北宋の都は汴州（開封）。南宋は臨安（杭州）である。人口は約一億。五人家族が標準だったようだ。

唐代の支配者であつた門閥貴族層は消滅し、代わって新しい支配者層である士大夫による時代がはじまった。

士大夫は新興地主層や大商人層の出身者であり、科挙で選ばれたエリート知識人たちである。

こんどは貴族に代わり特権階級になつた彼らから庶民は搾取されることになる。

士大夫の理想はマルチ人間であつた。彼らは政治家・軍人であり、また文章家・詩人・書家・画家でもあつた。

趙匡胤は戦争を嫌い、文人官僚による文治主義と、科挙制度の確立による皇帝独裁制により平和をもたらした。

趙匡胤が石に刻させた遺言「石刻遺訓」は、宋朝の皇帝により宋滅亡まで守られた。

それは左の二条からなる。

- ・趙匡胤に皇位を譲つた柴氏一族を子々孫々にわたつて面倒を見る。

- ・言論を理由に士大夫（官僚／知識人）を殺してはならない。

宋代は市民経済が発達し、羅針盤、火薬が発明され、印刷技術が発達した。

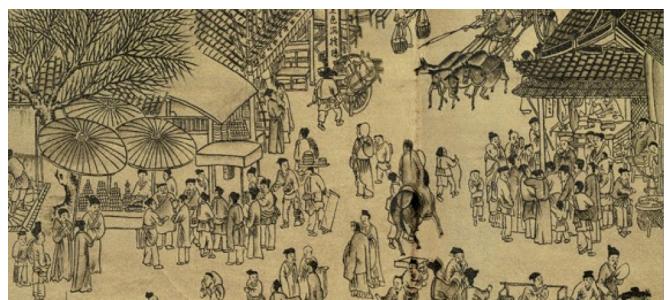
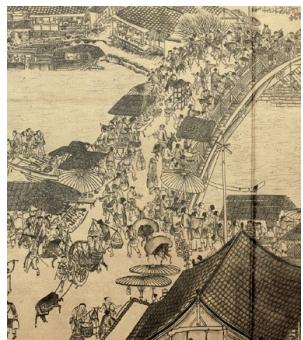
製紙・印刷技術の向上により、市民のあいだに文学・思想などがひろまつた。



趙匡胤肖像



「清明上河図」部分



「清明上河図」張擇端画

清明節の開封の生活風景画。

1643人の人物と208匹の動物ほか家屋などが描かれている。
24.8×52.8 cm
北宋末。北京故宮博物院蔵。

書道もろもろ塾 4—8 (2月)

中国陶磁器史上の最高峰といわれる宋代の白磁・青磁。

宋代には陶磁器がめざましく発達し、ヨーロッパによつて陶磁器すなわちチャイナとよばれるようになる。

宋代の青磁・白磁は、装飾が少なく、簡素美が特徴である。それは宋代の美意識の結晶の一つである。青磁・白磁は宋代を代表するとともに、中国陶磁史を代表するものである。

緑の青磁は实用のうつわとして作られた。

青い青磁は、北宋の後半（十一世紀末～十二世紀初）に汝官窯で焼かれた。それは、皇帝や士大夫の美意識の追求から生まれた。華やかな色はいつさい使わず、釉だけで緑や青を出し、内に美を秘めている感じ。その青は「雨過天青」（雨上がりの空の色）の色といわれ、世界に数十点しか残っていない。



北宋の五大名窯

（汝官窯・定窯・官窯・哥窯・鈞窯）



官窯 青磁菊花形瓶



景德鎮窯 青白磁牡丹唐草文梅瓶



磁州窯 白釉黒花牡丹紋梅瓶



磁州窯 青白磁貼花碗

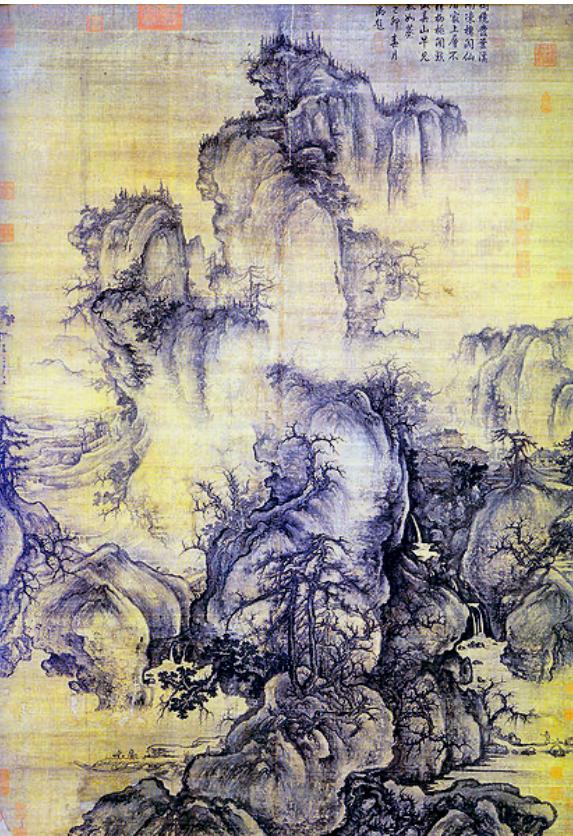
院体画と文人画の二流派の登場

院体画は宮廷の翰林图画院（略して画院）の絵師（専門の画家）による絵。色鮮やかで写実的。

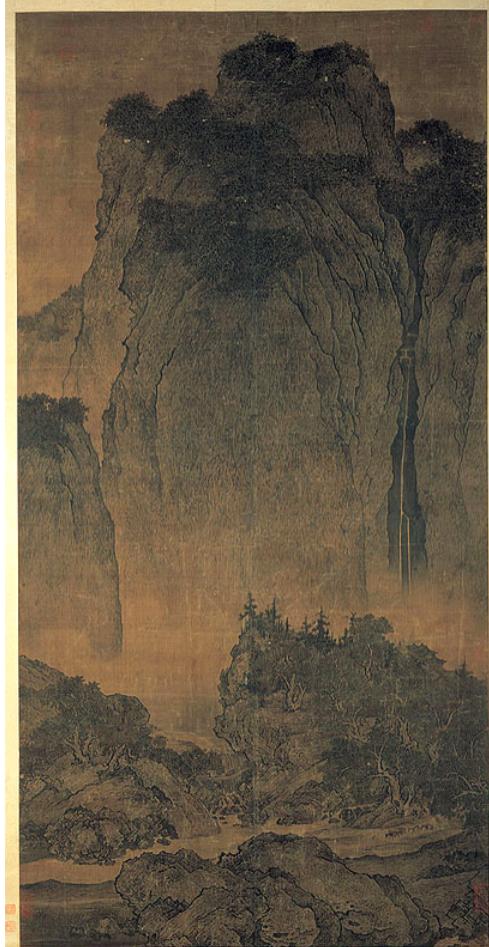
文人画（水墨画）はアマチュアの士大夫が描く絵。文人とは詩文を作る人の意味で、芸術家のこと。

宋代は水墨画の最盛期である。文人画の系統の山水画に李郭派がある。それは華北の山岳風景を描いた五代の李成とその弟子范寬、その李成と

范寬を総合して理想化された風景を描いた郭熙の流れである。郭熙の絵を蘇東坡と黃山谷は高く評価した。



郭熙 早春図



范寬 銘山行旅図



李成 晴巒蕭寺圖

五代・北宋山水画の特徴は、重厚で力強いことである。心の中の理想の山水世界を表現している。顏真卿晩年の楷書碑の全体から受ける感覚に共通している。

文人画の精神は、自己の精神をあらゆる束縛から解放し、自由自在に絵画に表現することであった。

北宋代の文人画の指導者は、蘇軾、黃庭堅、李公麟、米芾、文同らである。

唐・宋代の写実絵画に対して蘇東坡は「形似を基準に絵画を論じるのは子どもの見方と変わらない」として「似てないを絵画の良し悪しの基準にしてはならない」「精神上の表現が發揮されているかどうかによって品評すべきだ」と写実志向に反対した。

蘇軾の師である文同の画法。「胸中成竹」

竹をスケッチするのではない。

胸中に生まれた竹のイメージを絵画化するのである。



文同 墨竹図



蘇軾 竹石図巻 部分

書と絵画の共通点は、線と構成と作品全体から受けける感覚にある。

「書画同源」論

晚唐の美術史家張彦遠によつてとなえられた、書と絵画は双生児であるという論。

書と絵画は筆の運び方（用筆）が同じであると述べている。

書は各点画や書体によつて用筆が異なる。絵画も書と共通した用筆法で書かれる。

元代の趙子昂は自分の絵で書画同源を説明している。

「石は飛白の如く、木は籀文の如く、竹を写しては書の八法に通じるべし。」

よくこれをかいする人あれば、書画はもともと源を同じくすることを知るべし」

左の絵の石の輪郭線は「飛白」で「こつこつした感じ」を出している。

木は「大篆（籀文）」の丸みのある線で、枯れた古木の感じを出している。

竹は「永字八法」の用筆で書かれている。



趙子昂 疏林秀石圖 部分



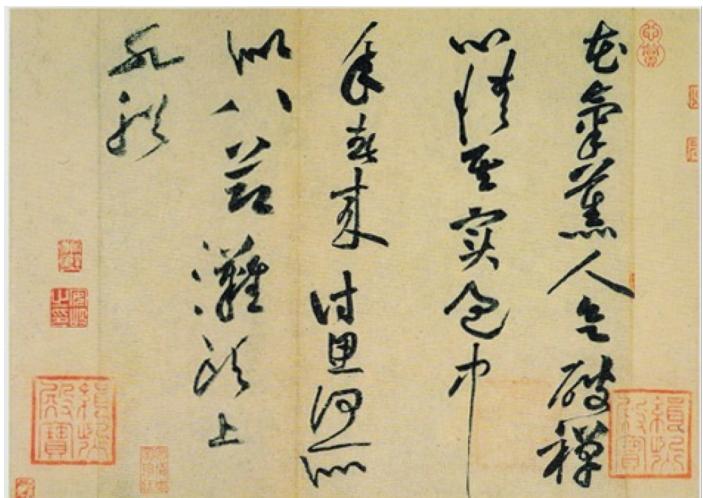
中国絵画の用筆法の代表的なもの。

「臥筆」、「拖筆」、「破筆」、「頓筆」、「順筆」、「逆筆」など。

運筆のさいの速緩急や抑揚による線質の変化により画家の感情を表現する。その他十八種の線描法などがある。

「行」（まっすぐ一気に最後まで描いた滑らかな線）と「留」（頓挫して一気に描かない線）の調和。

下絵を描かなくてもよいくらいの大きさの作品の場合、書と同じように構成されてゆく。



こうていけん
黄庭堅 かきくんじんしちょう
花氣薰人詩帖

美意識の共通点

作品全体から受ける感じ。作品の印象。におい。色彩。音楽または響。詩情。字は人なりか?
絵画の場合には形や色彩、書の場合には点画の構成により表現されている作品全体の雰囲気。



ぶんちょうめい 明 文徵明 古木寒泉圖
縦横に伸びた線が、黄庭堅の花氣薰人詩帖と
雰囲気がている。



かんどう 五代 関同 秋山晚翠図

どっしりと落ちついて重厚な感じが顔真卿の作品と共通している。



顔真卿 颜勤礼碑 部分

千季高貌遷衛
尉卿憲御史 中衛
丞城守陷賊東

宋の三大家

蘇軾・黄庭堅・米芾の三人の書人を宋の三大家とよぶ。
蔡襄または蔡京を加えて宋の四大家ともよぶ。

蘇軾（1036～1101年）本名は軾。字は子瞻。

号は東坡居士。四川省眉山県の生まれ。

近世最大の文豪で、「唐宋八大家」の一人である。

宋詩は蘇軾からはじまつたといわれる。

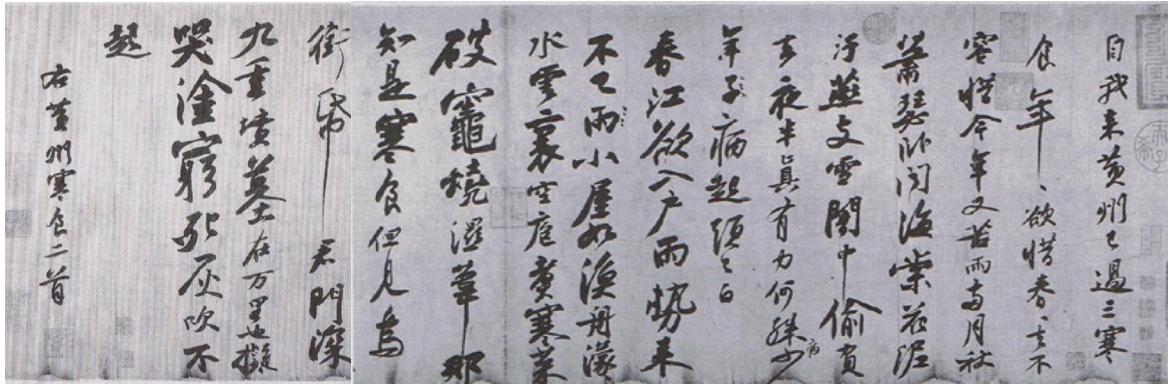
詩文だけでなく、詞や書画や思想史、自然科学史の分野にも業績をのこしている。

名門の出ではないが、科挙の試験で欧阳脩にみとめられ、その弟子になりエリート文人政治家として出世したが、

しかし、後半生は流罪や左遷されるなどの逆境のなかで生きぬかねばならなかつた。

書は王法と顥法を基本に独自の書境に至つた。書の技巧よりも書人の人間性を重んじた。

黃州寒食詩卷 元豐五年（1082）



右 黃州寒食二首



蘇東坡肖像



静かに小さくはじまつた最初の一字でこの書がただならぬ作品であることが分かる。

蘇東坡は「我が書は晉造、本より法なし」と言つたが、真意は何か。この言葉をまにうけることはできない。「意造」とはすきかつてに造り出すこと。

目には見えない中心線にからみながら、字が積み上げられ、行が構成されていく。

縦長で細い「自」を受けて横広の「我」が右上がりに書かれ、それを左に引っ張るように細く縦長の「來」が左寄りに書かれる。つづく「黃」は「來」のそりと反対にそつて右に揺れもどす。つづく三字は行の中心に大小大と真直ぐに書かれ安定をとりもどし「三寒」とやや左に流れる。

自 我 来 黃 州 も 過 三 寒

一行目を受けて二行目が構成されてゆく。

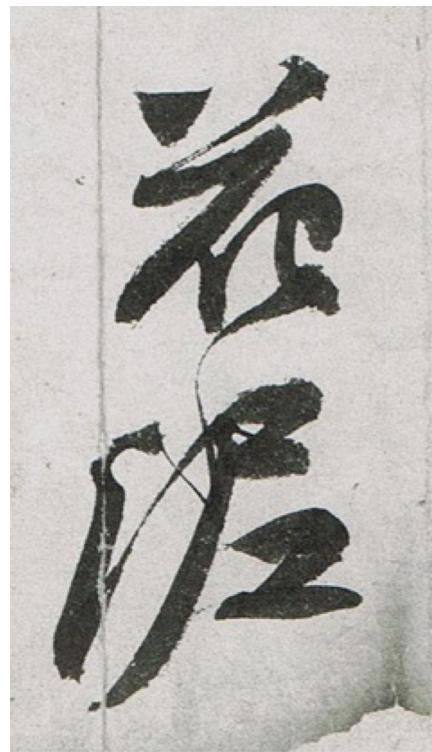
長大な「年」の後にひしやげた「欲」小さな「去不」

高ぶる感情のあらわれだろうか。

紡錘形に行が構成されている。

三行目は高ぶった感情を静めて行間をつめ、縦長とひしやげた形がリズミカルに繰り返されている。行もほぼ真直ぐにスーと伸びている。

自 我 来 黃 州 も 過 三 寒
食 年 、 欲 情 善 、 去 不
客 将 今 年 又 苦 而 有 月 杜



ほさき
峰先に神經が集中し、点画のすみずみまで気持ちがこめられている書きぶり。
蘇東坡は提碗で筆を倒して書いたらしい。字のゆがみはそこからきているのかもしねれい。
「臥筆」 「偃筆」などと言われる。

